内科画廊の始まりと終わり

宮田有香

貸画廊はいわば一個の試験管であって、それは何でも入れることができ、誰でもが占有し、その恣意のまゝに使用しうるところの透明でまったく無性格な空間である。今日のように、特殊的に実験的精神の強調されねばならぬ時期に於ては、貸画廊のこの試験管的性格はきわめて大きな有効性をもつものである。

――宮田國男「NAIQUA GALLERY 画廊マニフェスト」

「内科画廊」命名

内科画廊は1963年から67年にかけて、東京の新橋駅西口前のビル[1]の3階にあった貸画廊である。展覧会スケジュールの記録は1963年7月から1966年2月までの2年8ヶ月しか残っていない[2]。画廊をはじめたのはインターン中の医大生、宮田國男（1936〜1984）であった。1946年から診療所「宮田内科」を開業していた宮田の父親が1963年3月に急逝した。父親にかわり開業するまでにはまだ時間がかかる宮田はそのスペースの使い道を思案した。宮田の幼友達には画家の中西夏之がいた。中西は当時、高松次郎、赤瀬川原平とハイレッド・センターを結成したばかりだった[3]。5月末、彼らはその診療所跡でハプニングとイヴェント「第6次ミキサー計画・物品贈呈式」を決行した。この企画が、宮田に貸画廊の可能性を示唆した。そして、中西が「内科」の文字を残し画廊にすることを宮田に勧め、内科画廊が始まったのである[4]。

IN VIVOの芸術運動の必要性が説かれるとしても、それはIN VITOROの必要性を減ずるものではなく、その為には更に多くの試験管――貸画廊が必要とされるのである。

ところで試験管といっても、一輪ざしにもなり、或は又ウィスキーカップにすらなりうるのであって、試験管が試験管としての機能をもつのは、実験室に於いてであり、しかも明確な意図をもった実験者の手によってである。

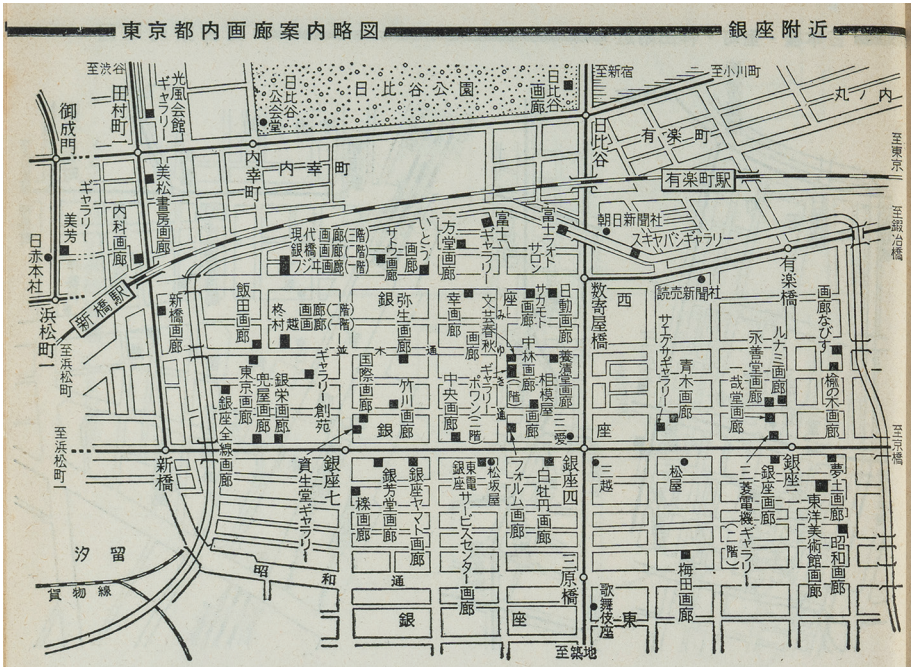
今度新橋西口駅前のビルの一角に新設された内科画廊はすべての作家或は運動体に開かれているが、その希望するところは正にこの試験管としての機能である。〔中略〕

実験的意欲にもえた多くの作家が利用されることを希望する次第である。

――宮田國男「NAIQUA GALLERY 画廊マニフェスト」

1960年代前半の美術動向と貸画廊

内科画廊が活動を開始する1960年代前半は、安保闘争から東京オリンピック開催という出来事が代表するように、日本が敗戦から復興を遂げ、高度経済成長へと邁進するなか、大きな揺さぶりがかけられた時期である。美術界では若い作家たちが、既存の評価基準であった美術団体や師弟関係に入ることを選択せず、同年代の少人数のグループや個人の活動に大きくシフトしていく。全国各地で続々と前衛グループが結成され、従来の制作方法にとらわれない新しい表現が模索された。材料も日用品や廃材などを様々に組み合わせ、あるい



『美術手帖』1964年1月号、127頁より。

は行為や状況、概念までも作品化し、既成の枠組みを壊していった。しかし、彼ら彼女らがその実験的な作品を発表できる唯一の場所といってよい無鑑査・無審査で行なわれてきた公募展「読売アンデパンダン」展が、1962年に陳列作品に関する規格基準を制定し、1963年には会場の美術館側から一部の出品作品についての撤去要請がなされ、1964年には主催者によって展覧会の中止が宣言されてしまう。発表の場を失った作家たちの多くは貸画廊に流れ込み、その需要から東京では貸画廊が急増した。実験者を求める内科画廊がオープンしたのはまさにその直前だった[5]。

内科画廊と作家たち

6月に入り宮田と中西らは自らペンキを塗り内装を変え、古代の医学書に載っていた心臓のイメージから画廊のマークを考え、公式の案内状はオレンジ色の紙、専用の封筒は緑色に決め、使用申し込み書を刷り、「画廊マニフェスト」を書き、開廊案内を郵送した（こ

の時点でいくつかの企画が挙がっている)。この頃宮田が付けていたノート「NAIQUA GALLERY」には、To doリストや複数の関係者の連絡先、企画展案の間に、症例や診断に関するメモがあり、二足の草鞋で画廊運営に挑戦していたことが窺える[6]。

そして7月に貸画廊として和泉達の個展からスタートした。換気扇や電灯といった室内の設備や備品に、そのモノの名称のキャプションを付けただけの「何もない」展示だった[7]。この時の案内状にはオレンジジュースの粉末とストローが同封され、最終日のクロージングでは来場者が粉末を持ち寄ってオレンジジュースを飲むイヴェントが行なわれた。最初の個展からその後の内科画廊を象徴していたと言える。続けて美術評論家・中原佑介による企画のグループ展「不在の部屋」(赤瀬川原平、福岡道雄、中西夏之、オチ・オサム、清水晃、須賀啓介、高松次郎、田中信太郎、立石紘一[タイガー立石]、吉仲太造)、コラージュによる色盲検査表でシェル賞を受賞した清水晃、飯村隆彦や大林宣彦による「シネマテーク」、三木富雄の「耳」による初個展、内科画廊での展示最多作家となっていく篠原有司男の個展、算盤をモチーフにした関根美夫……と、作家たちによって「内科画廊らしさ」がつくられていった。

各地から内科画廊を目掛けて、様々なグループや作家たちが集まり、作品を発表した。「ネオ・ダダイズム・オルガナイザーズ」の風倉匠、岸本清子、田辺三太郎、豊島壮六、吉野辰海、「観光芸術研究所」の中村宏、立石紘一、「時間派」の田中不二、「ゼロ次元」の岩田信市、加藤好弘、小岩高義、「具体美術協会」脱退後東京に活動を移した岡田博、関根美夫、「集団α」の飛永頼節、「岡山青年美術家集団」に参加した林三從、江草昭治、「九州派」の大山右一、桜井孝身、米倉徳、谷口利夫、働正、木下新、等々。狭いスペースでどのような展示をしたのだろうかと思う39名もの作家が参加した大正炭坑闘争を支援する「後方の会」のためのオークション、来日中のジャスパー・ジョーンズやサム・フランシスを迎えて行われたハイレッド・センターの画廊閉鎖イヴェント「大パノラマ展」、サトウ画廊との共同企画展「戦後美術　コミックとユーモア」なども開催された。記号的絵画によって空間を埋めた谷川晃一と、男女の笑い声を録音して制作したサウンドでその絵画空間とセッションをした小杉武久、大小の自作の「おみやげ」ステッカーを貼り巡らして作品を価値づけすることを無効化してみせた森内敬子、天井近くまで積み上げたラブレター(実際は新聞紙)に観客をよじ登らせて彫刻作品を見せた久保田成子、大きなビニールを広げカラーラッカーで街の影像を描き画廊空間に都市を内包させた市毛富美子(イチゲフミコ)など、今でいうインスタレーションや体験型など、空間の使い方も展示方法も様々に展開した。

「イヴェント」という言葉をあえて使わず「ACT」と名付け、東京駅から画廊まで手型を付けて移動した岡部道男は、台座付きのハリボテ彫像をパブリックスペースに仮設置するパフォーマンスを行なった。刀根康尚は音楽

作品を募集、審査と同時に展示し、演奏（発表）する＝インヴェスティゲイション・イヴェントを実行した。そしてその「刀根賞」応募作品「首都圏清掃整理促進運動」（銀座で白衣を着て清掃をするパフォーマンス）[8]では「ハイ・グループ」[9]が画廊を飛び出して行った。小野洋子（オノ・ヨーコ）は想像することで、松澤宥は観念によって画廊空間を超え、美術の領域をも拡張していった。

1960年代から70年代にかけて世界各地で同時多発的に起きていたコンセプチュアル・アートや偶然性を取り込んだ作品が、日本でも同時期に制作され発表されていた。さらにそれらが国境を越えて呼応していたことも内科画廊の記録から確認できるのである[10]。

内科画廊の終わり

内科画廊はこうして前衛美術の拠点のひとつとなったが、冒頭に書いたように活動の記録は1966年はじめまでしか残っていない。後年に限られた作家に対して著者が行なった聞き取りのなかで閉廊時期を鮮明に記憶していたのは、閉廊後改装を依頼された谷川晃一だけだった[11]。宮田は病院勤務と開業にむけて多忙になり、また関係者の多くは1965年頃から本格化した「千円札裁判」や、表現とは何かを問う活動に集中していった。そして作家たちそれぞれの方向性は定まり、海外に向かう者、美術以外の分野を選択する者も含め、個々の活動へと邁進していった。実験的な発表の場としての内科画廊の役割は終わったのである。

1967年9月、神経科クリニック開業の準備が整った宮田は、閉廊を告げるテキストと開業広告とを『美術ジャーナル』に掲載し、内科画廊の扉を閉じた。そのテキストには次のように記されている。

> あなたの前に突然84立方メートルの空間が提供されたら，あなたはどうしますか。〔中略〕
>
> 目の前にあるこの透明で無性格な空間，その空間としての純粋性は，とても魅力的なものでした。計量されるというまさにそのことによって，それは無限の可能性をもっていたのです。
>
> 可能なだけその所有性即ち規定性を稀釈すること，可能な限り所有形態から遠ざかること--------私有財産別［制］の下ではそれは賃貸借という現象形態をとるでしょう--------それだけが私に開かれたものとしてその空間の純粋性を所有できる途だったのです。
>
> このような空間の日常性の拒否が，この場所で私と前衛芸術との出会いを必然たらしめたのだといえます。〔中略〕
>
> かくして1963年の夏から1965年の夏へかけての2年間，貸画廊が前衛芸術の一拠点であった時期を，NAIQUAが代表できたのは，それが貸画廊の無規定性即ち非所有化をもっとも徹底的に追求したからというだけのことに帰するのですが，同時にそれ故に，NAIQUAの存在そのものが3年にして消滅という道をたどらざるを得なかったといえましょう。
>
> ——「NAIQUA TIMES No. 2」内科画廊発行[12]

[1] 大正11年9月に竣工した「堤第二ビル」は5階建の貸事務所用の鉄筋コンクリート造だった。2000年代まで残っていたが取り壊され、ラ・ピスタ新橋が建った。堤第二ビルについては瓜生康一著「貸事務所実例　第三一號」(『鉄筋混凝土の知識と建築の実際』二松堂書店、1924年、329頁)と「事務所の平面計画:東京に於ける貸事務所建築(1)」(洪洋社、1928年、26-27頁)を参照。

[2] 主に『美術手帖』に掲載されている「展覧会だより」を参照。内科画廊のスケジュールが初掲載されたのは1963年8月号。

[3] グループ名は3人の苗字、高松(ハイ)、赤瀬川(レッド)、中西(センター)から命名された。後に和泉達が加入。企画やハプニングによっては川仁宏や刀根康尚、谷川晃一らも参加した。

[4] 中西夏之「美の証言者達・現代美術を側面から支えた2人の死:内科画廊宮田國男」(『アトリエ』1985年1月号、113-117頁)参照。

[5] 1960年4月の『美術手帖』の「展覧会だより」に掲載されている画廊は東京エリアのみで15件に対し、1963年5月には29件。1965年には『藝術新潮』の画廊特集で各画廊の紹介文「東京の100の画廊」(1965年12月号、77-79頁)を担当した中原佑介は内科画廊を、「ここは、ハプニングあり、絵のまったくない展覧会ありで、いうなれば『超前衛型画廊』」と紹介している。

[6] 宮田國男「必要なのは内科であって外科ではない」(『美術手帖』1964年5月号、56-57頁)、篠原有司男「内科画廊」(『美術手帖』1965年6月号、90頁)でも当時の運営の様子が窺える。

[7] 「ハイレッド・センター:『直接行動』の軌跡」展カタログ(名古屋市美術館他、2013年、86-87頁)に詳しい内容が紹介されている。

[8] 応募規定には「あなたにとって音楽である作品をお寄せください。内容、形式、に制限はありません」「展示可能な範囲内で制限なく受け付けます」とあり、音楽雑誌『音楽之友』(1964年9月)に載せた「第1回／刀根賞作曲募集」広告には、現象の提示は不可能につき応じられないため文章等の形で応募するよう明記のうえ、「Co[n]currence event 1964 Tokyo」と記載されている。審査員兼演奏家として12名の美術家、音楽家、舞踏家、美術評論家の名前が挙がっている。

1965年にニューヨークで久保田成子が編集したハイレッド・センターによる21件の「直接行動」を写真とマッピングで紹介した両面ポスター『HI RED CENTER』(Fluxus発行)にも掲載され(No. 20)、1966年にはFluxus(フルクサス)によって再演された(前揚注7の154-155頁参照)。Fluxusはジョージ・マチューナスが命名し、多国籍のメンバーを迎えてニューヨークを中心にハプニングやイヴェントを展開した。マルチプル作品や紙媒体の発行物も多く手がけた。注6の宮田のエッセイではマチューナスから内科画廊の案内を送るよう連絡をもらったことが紹介されている。

[9] 「首都環境衛生実行委員会」が主催し、この会の本体は「ハイレッド・センター」と「グループ・音楽」をコンバインした「ハイ・グループ」だと刀根康尚が雑誌『新婦人』(刀根康尚「ハイ・グループあるいは幻影の時代のグループ」1964年12月号、102-104頁)で紹介した。

[10] 1963年の和泉達の個展の案内状は、1964年1月に発行された『フルクサス新聞(Fluxus cc V TRE Fluxus)』No. 1に掲載された。

[11] 2000年3月に開催した内科画廊の案内状を紹介し、展覧会年表を明らかにする目的の展覧会「内科

画廊―'60年代の前衛」展(黒川修一、宮田有香企画、京都造形芸術大学・京都芸術短期大学 芸術館主催、会場は同大学GALLERY RAKU)準備期間に行なった調査のための聞き取り。展覧会年表は、1960年代当時画廊巡りをして詳細な記録を採っていた西山輝夫氏の協力を得て、開催予定だったものも含め明らかにした。展覧会の関連企画として谷川晃一氏、田名網敬一(当時同上大学芸術学部教授で、かつて内科画廊には頻繁に出入りしていた)を迎えての座談会のほか、長野千秋監督作品『ある若者たちの記録―愛のバイブレーション』(1964年)、城之内元晴監督作品『シェルタープラン』(1964年)を上映した(協力:オルフェの袋小路 山下信子)。

[12]『美術ジャーナル』1967年9月15日、2-3頁に掲載。[ ]内は発行後の宮田國男による誤植修正。

＊本稿は黒川修一、宮田有香編「内科画廊―'60年代の前衛」目録(2000年)所収の「内科画廊の始まりと終わりとその背景」に加筆・修正を施したものである。

「内科画廊―'60年代の前衛」展 案内状